

日本での2週間：ブロニスワフ・ピウスツキとアイヌの足跡をたどって
今年6月、私は初めて日本を訪れました。スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館を代表して、
当館副館長で日本研究者兼外交官のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ博士と同行しました。

私たちの目的は、ピウスツキ兄弟に関する展覧会のコンセプトを日本の博物館に提案することで、私たちは兄弟が故郷で生まれた精神的な基盤——ポーランドの独立の立役者となったユゼフと、アイヌ文化の研究者となったブロニスワフを形作った価値観——の物語を伝えたいと考えています。



私たちの旅は、東京、敦賀、松山を経て、ブロニスワフと彼の仕事に結びついた北海道へと続きました。彼の仕事はアイヌの遺産を記録し保存する上で重要な役割を果たしました。札幌では北海道ポーランド文化協会の方々との会合、私は20世紀初頭に祖国独立のために戦ったポーランドの女性たち——ユゼフ・ピウスツキの妻でポーランド社会党の活発な党员、熱心な社会活動家であったアレクサンドラ、および国会議員、女性解放運動の活動家、政治家であったゾフィア・モラチェフスカ——について話しました。二人は当時の現実では並外れた決意と性格の強さを要求される中、公的活動と私生活を両立させたのです。

最も印象深かったのは、平取と白老のアイヌに関する博物館や遺跡への訪問でした。本でしか知らなかった生活用具、衣服、道具を実際に目にし、両館の館長から伺ったお話——この民族の歴史、物質的・精神的遺産、そして自然との深い絆——から、アイヌの記憶が今も生き続け大切に守られていることを感じました。アイヌ文化の多くの証言を眺めながら、リトアニア国立博物館と共同で準備中の展覧会「世界の間にある魂：日本の先住民族アイヌ

とブロニスワフ・ピウスツキ」を想起しました。この展覧会はブロニスワフの誕生160周年を記念して2026年に開催されます。ポーランドで、二風谷アイヌ文化博物館の本物の遺物を展示できることを嬉しく思います。これらの遺物は、アイヌ文化を一般の方々に身近に感じさせ、その保存へのブロニスワフの貢献を強調するでしょう。



私たちは白老の国立アイヌ民族博物館「ウポポイ」にあるブロニスワフ・ピウスツキ記念碑に花を供えて、数世紀にわたりアイヌ文化と深く結びついた北海道での滞在を非常に象徴的な形で締めくくりました。そこでは私の同胞の記憶が鮮明に温かく保存されているのを目にして感動しました。

私は素晴らしい人々との出会いの温かい記憶を胸いっぱいに戻りました。最初の瞬間から、日本のおもてなしの文化に感動しました。私たちに親切にしてくださり、多くの時間を割いて知識と情熱を共有してくださったことに心から感謝します。特に安藤厚教授には、個人的な配慮と北海道での旅程の手配に、また私の旅の仲間であるロドヴィッチ博士にも、心から感謝します。

再度日本を訪れたいと思っています。その機会はきっとあるでしょう。そして、これは私たちの協力関係の始まりにすぎないと思っています。

(マウゴジャータ・バサイ Małgorzata Basaj, スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館展示・普及部長)

実り多く有意義な日本滞在を終え、POLE誌上で北海道ポーランド文化協会のみなさまにご挨拶できることをたいへん嬉しく思います。私たちの博物館のキュレーター兼部長のマウゴジャータ・バサイ氏と共に、私たちは将来の展覧会に向けた重要な仕事に携わることができました。

当館で計画している日本とポーランドの展覧会は、一つはリトアニア・英国・日本との共同企画、もう一つは敦賀市・松山市・白老町との共同企画です。それらについては、友人のマウゴジャータが書いているので、ここでは繰り返さず、その発展についてもう少し詳しくお話しします。

私たちの視察旅行は、ポーランド文化・国家遺産省の「インスピレーション・カルチャー」プログラムの助成金を受けて実施されました。

ポーランド史上の重要人物について日本の観客

や聴衆にどのように伝えるべきか、私たちは長い間考えてきました。

日本では、ピウスツキという名前はサハリンと北海道のアイヌ民族とニヅフ民族の研究に貢献したブロニスワフ(1866-1918)との関連で広く知られています。1903年の彼の滞在を記念して2013年に白老町に建てられた記念碑は、それをよく表しています。しかし、彼の弟で、1918年のポーランド独立の父の一人であるユゼフ(1867-1935)については、歴



史家や専門家以外、知っている人はほとんどいません。とはいえ、二人が生涯を通じて社会正義のために全力を尽くし献身するという理想を体現していたことは特筆すべき点です。

ユゼフは優れた軍司令官、カリスマ的指導者、そして強力な政治家でした。ブロニスワフは比較的穏やかな性格で、暴力が嫌いでした。サハリンの流刑地に滞在中や、1905年の革命期のウラジオストクで、極度の暴力を目にしました。兄弟の行動はリトアニア生まれのポーランド人に典型的な家庭環境と幼少期の教育によるところが大きかったのです。例えば、模範的な人格を持った母親マリアの役割についてお話ししましょう。もう一つのテーマはポーランドのロマン主義と、それが掲げた理想、すなわちポーランド独立への献身です。私たちは今度の展覧会でこの物語を紹介したいと思います。

展覧会は、ポーランドの歴史と関わりの深い日本の各地——人道の港敦賀ムゼウム、(1904～05年に捕虜収容所が設置され数十人のポーランド人兵士が滞在した)松山市の坂の上の雲ミュージアム、そして白老町——で開催したいと思います。現在、この展覧会は2027年春～28年秋に予定しています。

日本滞在中に2種類の講演を行うことができ嬉しく思っています。バサイ氏はポーランド独立運動における女性の役割について、私はピウスツキ兄弟と新渡戸稲造について話しました。新渡戸稲造の物語はポーランドではあまり知られていませんが、彼はユゼフ・ピウスツキ、ロマン・ドモフスキ、イグナツィ・パデレフスキといったポーランドの偉大な政治家たちや、マリア・スクウォドフスカ=キュリーとも会見し、彼らを深く尊敬していました。私はそれについてポーランド語で本を執筆し、この7月に当館から出版しました*。



今回の滞在中では、ピウスツキ兄弟に関する今後の展覧会の説明だけでなく、2026年にブロニスワフ・ピウスツキ生誕160周年を記念して開催される「アイヌ文化とブロニスワフ・ピウスツキ」展についても触れる機会がありました。この展覧会については、バサイ氏の寄稿で詳しく知ることができます。

安藤厚教授と、以前から深いご縁のある多原良子氏が平取町と白老町を巡る綿密に準備されたツアーに同行してく



ださいました。協会のみなさまはご記憶かと思いますが、彼女は2022年にポーランド・アイヌ『祖霊祭』/シンヌラッパ・ケンネニサツというプロジェクトでアイヌ女性会議「メノコモシモシ」を率いていました。

この旅の前、札幌エルプラザでの北海道ポーランド文化協会主催の講演の後、聴衆のみなさまと非常に有意義な懇談を行うことができました。個人的には元駐日リトアニア大使のアルギルダス・クジス博士にお会いできてとても嬉しかったです。彼は現在、ポーランド・英国・日本共同のアイヌとブロニスワフ・ピウスツキ展の開催にご協力頂いています。

もう一つの素敵な出会いは、ブロニスワフ・ピウスツキにちなんだ新作能を制作されている能楽師の津村禮次郎先生との出会いでした。



全体として、今回の日本旅行は非常に過酷な旅で、ワルシャワー成田ー東京ー敦賀(京都・岡山経由)ー松山ー成田ー札幌ー平取ー白老ー新千歳ー成田ーワルシャワと、飛行機、新幹線、JR特急、車を乗り継いで、本当に大変でしたが、私たちはこの仕事が好きですし、日本や日本人の方々とお会いできることはいつも素晴らしく、刺激的です。

また、すべてのロジスティクスを手配してくださった、開発・国際協力部長の同僚、アンナ・ヴァホヴィアック氏にもたいへん感謝しています。彼女は素晴らしい仕事をしてくれました。

ありがとうございました。またお会いしましょう!
(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ Jadwiga Rodowicz-Czechowska, スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館 開発担当副館長、元駐日ポーランド大使) 安藤厚訳



第 116 回例会
報告



講演&上映 『ポーランドと日本:

新渡戸稲造とポーランドの偉人たち』 6/10

本例会は参加者 45 名 (うち会員 14 名) とたいへん盛況でした。アンケートでは講演:「大変良かった」(5点) 14名、「良かった」(4点) 8名、「ふつう」(3点) 1名、平均 4.6 点、映画: (5点) 17名、(4点) 3名、(3点) 1名、平均 4.8 点とかなりの高評価でした。(安藤厚)

アンケートにおけるコメントより

- 1: 講演) 長い間、周辺の大国に支配・抑圧された歴史を持つポーランドという国を、今日は女性の活動という視点から改めて学ぶことができました。恩師がワルシャワ大学に留学(短期)された折、同国を訪れる機会を得て国内を旅した日々を思い出しました。その若き日々により深く同国の歴史(東欧の諸国を含めて)を学んでおくべきでしたが、ショパンの音楽の背景にある愛国の思いは受け止めて帰国の途についたことを思い返して今日のお話を聴きました。
- 2: 映画) 改めて彼ピウスツキの人生を追うことができました。もう少し時間をかけて探求したい人物です。これからの協会の活動を期待して居ります。(60歳代)
- 1) 「空飛ぶ大学」の存在を初めて知る。波(ポーランド)史の概説本はどうしてもピウスツキや政治家、政党の話になってしまい、なかなか女性に焦点が当たらない。私にとって貴重な話でした。本題とは別件だが、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日波大使の能について、昔、朝日だか、読売だかで読んだ。実演は無理としても、映像で見られないものか。
- 2) ブロニスワフとチュフサンマの話は知っていても、その孫以後の人々の事は全く知らなかった。なんか頼もしく思う。彼はザコパネにも足跡を残している… 知ることが増えた映画でした。只、白黒画像の字幕は読みづらい… 読めなかった。(70歳代)
- 1) 新渡戸とポーランドとの関係については全く知りませんでした。大変興味深く聞きました。女性が独立運動で活動したことが興味深かったです。「空飛ぶ大学」のことも初めて知りました。
- 2) 大変おもしろい内容でした。多くの人に見てほしいと思いました。ありがとうございました。(60歳代)
- 1) ポーランドという国・国民は、不屈の精神で生き抜いてきたのですね。
- 2) ブロニスワフの人生に驚きと共感しました。ポーランド映画でここまでアイヌ民族の生きた世界を再現したのは素晴らしいと思いました。(70歳代)
- 1) 19~20世紀に掛けてアレクサンドラ・ピウスツカやゾフィア・モラチェフスカが積極的にポーランドの独立活動に実質的に関わっていたことを、はずかしながら初めて知りました。大変興味深く拝聴させて頂きました。また、これらの女性の活動が現在のポーランドの女性活動においても、何らかの形で継承されているか、ちょっと興味が起きました。貴重なお話ありがとうございました。
- 2) ブロニスワフ・ピウスツキ兄弟についての概要が端的にまとめられた素晴らしいドキュメンタリーだと思

います。ピウスツキ兄弟の日本についての関わりも大変興味深く思え、日本とポーランドとのつながりも、将来的にも継続されてゆくべきものと改めて考えさせられました。素晴らしいドキュメンタリーの上映ありがとうございました。(60歳代)

- 1) 大変勉強になりました。知らない事がたくさんありました。



キュリー夫人が「空飛ぶ大学」で勉強したのをはじめて知りました。ポーランドの女性の向上、社会参加など、とても苦労し戦いぬいたのですね。詳しく知る事が出来たいへん良かったです。

- 2) (ウポポイで貴協会によるご紹介で本イベントについて知りました) ブロニスワフ・ピウスツキ氏のリサーチを行っております。彼の人生、アイヌの人々との交わりの根底が理解できました。ありがとうございました。ブロニスワフが樺太を離れざるを得なかった理由が解りました。大いなる民族学者です。ニシパ!! (80歳代、能楽師)

- 1) 独立に賭ける思いと重ねての蜂起を支えたものは何なのか。その過程の中で女性の社会的参加が実現されていることは(できればもう少し時間がほしかった) 初めて知ることばかりで驚かされました。ポーランド独立軍のことは少し読んでおりましたが、女性解放の動向は初めて聞くことでした。(70歳代)

- 1) 新渡戸の功績をもっと知りたいと思った。ポーランドにおける女性の社会進出の経緯を知ることで、今日のポーランドをもっと深く理解することができるのではと思ったところです。

- 2) ブロニスワフの生きざまをもっと多くの日本人に知ってもらいたい。(50歳代)

- 1) 新渡戸稲造と日本とポーランドの独立運動家の関わりと、ポーランドの独立運動の中で女性解放が欧州でも先駆的な事になっていた事を知ることが出来てとても良かった。

- 2) 映画で見て、人物像、心情、生涯、業績、現代へのつながりをしっかりと実感できた。サハリンを去った後も業績があった事も知ることができて良かった。(50歳代)

- 1) 資料があり理解の助けとなったが、内容が多く全て理解するのが大変だった(特に2つめの講演)。

- 2) 参加でき、この映画を見る事ができ大変よかったです。ピウスツキという偉大な人物を知る事ができ、良かったです。(70歳代)

- 2) ピウスツキ・ブロニスワフについて勉強します。(70歳代)

- 2) 大変貴重な映画で感激しました。ありがとうございました。(60歳代)

1) 日本とポーランドの歴史的つながりが、国家レベルであった事を初めて知ることが出来ました。(70歳代)

1) ウィーン会議後の分割ラインが示されればよりよくわかったと思う。(60歳代)

1) とても興味深い内容でした。

2) 貴重な知識を得ることができました。(40歳代)

1) 普通なら知ることのできないポーランドの歴史、日本とのつながりについて、お話を聞くことができて良かったです。

2) アイヌ文化の広まりがポーランド出身の人物と関わりがあるとは全く知りませんでした。とても勉強になりました。どうもありがとうございました。(20歳代)

1) 講演1, (…) 2ともに、配布資料をいただけるのであれば、読みあげは短縮してもよいのではと思います。(50歳代)

1) ポーランド人のロドヴィッチさんが新渡戸稲造を研究していらっしゃるのに驚くと共に、新渡戸の著作『東西相触れ』と『偉人群像』のポーランドに関する章をポーランド語に翻訳されたり、説明を加えたり、また新渡戸とポーランド文化人との交流関係を本にすべく執筆中とのことと尊敬いたします。ポーランドの歴史は苦難の歴史ですが興味深いです。

バサイさんが話してくださった、ポーランドの国の独立と女性の地位向上には女性たちが勇気を持って闘ったという背景があるというお話、ポーランドの女性は強いですね。マリア・ピウスツカの模範、アレクサンドラ・ピウスツカ、ゾフィア・モラチェフスカの活躍、キュリー夫人も含め、後者三人が「空飛ぶ

大学」で学んでいたことに感動です。

2) ピウスツキ兄弟の物語、兄弟愛、また兄のプロニスワフの運命はきびしいものだったが、行かされた場所で自分の使命は「他人の役に立つこと」と悟り、アイヌの人々に対して命をかけて助け、研究もし、教えたということに感銘を受けました。

この内容は川越宗一氏の『熱源』(直木賞)にほぼ同じように書かれてありました。私はこの本に感動し、このように苦しみながら愛し続けたポーランドのプロニスワフを尊敬します。ぜひ、この映画を川越宗一氏に紹介してほしいです。アイヌの方も川越宗一さんの『熱源』をお読みになるといいのになあと思いました。プロニスワフが東京に来ていたこと、お孫さんもいたことなどは知りませんでした。今日は新しいことをたくさん学びました。また、新渡戸の資料を配布させて下さり感謝です。(70歳代)

新渡戸遠友リビングラボ NELL プロジェクトにご支援を

1894(明治27)年から50年間続いた札幌遠友夜学校(新渡戸夫妻創設、札幌農学校(のち北大)の学生たち7百人が無償で地域の貧しい子どもたち5千人以上に博愛の精神で教えた学び舎)のあった現新渡戸稲造記念公園(札幌市中央区南4東4)に、誰もが(特に子ども、若者が)気軽に学び実践できる建物を、できれば2026年竣工で建築予定です。皆様のご支援をお願いいたします。詳細は WEB サイト参照 <https://nitobe-enyu.org/> お問い合わせは NELL 事務局 info@nitobe-enyu.org (三上節子)へ

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」を慕って 門間 巖

2014年、全国で活躍しているポーランド・ダンスの団体代表が集まり「日本・ポーランド民族舞踊友好協会」が発足しました。北海道では北海道ポーランド民族舞踊研究会「Do」が活動しています。毎年全国持ち回りで「ポーランドの祭典」を開催し、民族衣装をまといポーランドの踊りを楽しんでいます。

「シロンスク」京都公演とワークショップ 2025

スタニスワフ・ハディナ記念ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」は1953年に設立され、本拠地はシロンスク県のコシェンチン村の宮殿にあります。創始者のハディナ氏とは生前二度お会いすることができました。私事ですが、2016年には同舞踊団より「メシアシレジナ賞」とブロンズ像をいただきました。シロンスク舞踊団は2002年に初来日以来、何度も来日して各地で公演し、私たちはその後も継続して指導を受けています。

当協会とは2019年の来日時に公演・ワークショップで交流、夜の交歓会は大いに盛り上がりました。その後コロナ禍を挟んで、2021年6月に「パートナーシップ」協定を結び、毎年のように来日公演があり、計6名の若者が本拠地でレッスンを受けました。

今回は当協会主催で、3月15日に京都でシロンスク舞踊団の公演とワークショップを行いました。公演「フォーク・ヘリテージ」(民族遺産)プロジェクトは、ポーランド音楽の歴史における民族文化のインスピレーションの紹介が目的で、2024~25年にポーランド文化・国家遺産省の助成を受けています。

「シロンスク」の舞台はポーランドの民族文化とその普遍性を表現しています。有名なシロンスク地方の民謡「シュワ・ジェヴェチカ」(森へ行きましょう)は公演のたびに観客の心を捉えます。

午前の公演はホールがほぼ満席で、まず京都大学民族舞踊研究会の現役学生・OBOG がポーランドで習った躍動感ある「オベレック」を見事に踊りました。彼らは舞踊団本拠地での本格的なワークショップや現地公演鑑賞などで充実した日々を過ごしてきました。

続いて静かな舞台にショパンのピアノが響き、舞踊団のコンテンポラリーダンスの幻想的な輝きです。ダンサーが静かに回転する足音さえ聞こえる流れで、ショパンの繊細なピアノの音とシャープなダンスが見事に融合し新しい世界を見せました。

後半の民族舞踊は、新たな編曲が加えられた「ポロネーズ・マズール」から、色鮮やかな衣装と共に次々と踊りが続き、交互に繰り広げられる6名による歌声は豊かな声量で観客の心を魅了しました。



京都公演の会場風景

午後のワークショップは2会場とも満杯の参加者で熱気が溢れていました。第一会場はクヤヴィアク、ワルツ、ポロネーズでの踊りで、参加者は8歳の少女から大人まで。豊富な知識と経験に裏打ちされた分かりやすい講習でした。

第二会場のオベレックは大ホールのステージでレッスンの様子を見学できました。朝から夕方まで目一杯舞踊団と共に過ごした贅沢な一日でした。

「パートナーシップ」協定による若手育成と文化交流の事業は2023年に続き2度目で、ポーランドの踊りを愛する若者の育成は私たちの大きな目標、希望です。彼らを温かく受け入れてくれるシロンスク舞踊団に感謝すると共に、今後も双方にとって意義のある交流を続けて行きたいと願っています。

大阪・関西 EXPO

4月から夢洲で開催されている大阪・関西万博には、私たちもポーランド館に招待されて数々の展示物に圧倒されました。

5月3日はポーランドでも日本と同じ憲法記念日で、ポーランドパピリオン前で式典がありました。館長の挨拶で始まり、シロンスク舞踊団の「ポロネーズ・マズール」に続き、当協会メンバーも26名で「ポロネーズ・タデウシュ」を踊りました。沢山の皆様様に囲まれ晴れのステージでした。

踊りの後、シロンスク舞踊団、岐阜県恵那市から参加の小中学生も加わり、みんなでパピリオン前から「ユネスコ



パピリオン前から大屋根へパレード

の無形文化遺産」に登録された「ポロネーズ」の音楽に乗って会場内をパレード。目の前のエスカレーターでポーランド国旗を振りながら大屋根リングへと続く大行列は圧巻でした。記念撮影があちこちでパチリパチリ。

夜は万博ステージへ移動、期待いっぱいのシロンスク舞踊団公演で、私たちは最前列で鑑賞。3人の踊り手で始まる上シロンスク地方発祥の「トロヤーク」にはいつも心が奪われます。歌と踊りにパワフルな夜のパフォーマンスのあと、最後に感動のサプライズが待っていました。



夜のシロンスク舞踊団公演

中島みゆきの「時代」のメロディーに乗せて「今はこんなに悲しくて 涙も枯れ果てて…」と日本語で歌う女性シンガーに続き、団員全員がステージに勢ぞろいして歌うのを聞いて、観客全員が総立ちで拍手の渦となり、永遠に心に刻まれ、今でもこの瞬間が目に浮かびます。

当日の入場者は10万人!! 人気パピリオンは大行列で、私たちも各パピリオンを見て回ることはできませんでしたが、大屋根リングに上がり会場全体を夜空と共に味わい、かけがえの無い素晴らしい人生の1ページでした。

私たちが、ポーランドの踊りを楽しむことができるのもポーランドを愛する



ポーランド館前で記念写真

皆さんのおかげです。有難うございました。

(もんま・いわお、日本・ポーランド民族舞踊友好協会会長、仙台市)

Two weeks in Japan: In the Footsteps of Bronisław Piłsudski and the Ainu

In June, I visited Japan for the first time. As a representative of the Józef Piłsudski Museum in Sulejówek, I took part in a delegation together with Jadwiga Rodowicz-Czechowska Ph.D.– Japanologist, diplomat, and Deputy Director of our Museum. Our aim was to present the concept of an exhibition about the Piłsudski brothers and to propose it to Japanese institutions. We wish to tell the story of the spiritual foundations instilled in them at home – values that shaped Józef, the architect of Poland’s independence, and Bronisław, a scholar of the Ainu culture.

Our journey led us through Tokyo, Tsuruga, and Matsuyama, and on to Hokkaido – the island linked to Bronisław Piłsudski and his work, which contributed to documenting and safeguarding Ainu heritage. In Sapporo, we met with members of the Hokkaido-Poland Cultural Association, where I delivered a lecture on Polish women who fought for their country’s independence at the turn of the 20th century – including Aleksandra Piłsudska, wife of Józef Piłsudski, an active member of the Polish Socialist Party and a dedicated social activist, and Zofia Moraczewska – Member of Parliament, advocate of women’s emancipation, and a politician. Both women were able to balance public service with private life, which, in the realities of their time, required extraordinary determination and strength of character.

The visits that left the deepest impression on me were those to Biratori and Shiraoi – to museums and sites dedicated to the Ainu. I saw everyday objects, clothing, and tools I had previously known only from books. From the stories told by the directors of these institutions – about the history of this people, their material and spiritual heritage, and their profound bond with nature – I came away with a sense that the memory of the Ainu remains alive and is cherished with great care. Looking at the many testimonies of Ainu culture, I thought of the exhibition *“A Soul Between Worlds: The Ainu – Indigenous People of Japan and Bronisław Piłsudski”*, which we are preparing jointly with the National Museum of Lithuania and which will open in 2026, marking the 160th anniversary of Bronisław’s birth. I am delighted that in Poland we will present authentic artefacts from the Nibutani Ainu Culture Museum – objects that will help bring the Ainu culture closer to the public and highlight Bronisław Piłsudski’s contribution to its preservation.

We concluded our stay on Hokkaido – an island for centuries intertwined with Ainu culture – in a highly symbolic way: by laying flowers at the monument to Bronisław Piłsudski at the National Ainu Museum “Upopoy” in Shiraoi. I was moved to see how vividly and tenderly the memory of my compatriot is preserved there.

I returned to Poland with my mind full of fond memories – of encounters with wonderful people whose culture of hospitality touched me from the very first moments. I am deeply grateful for the kindness shown to us, for the time devoted to us, and for the sharing of knowledge and passion – especially to Professor Atsushi Ando for his personal care and for organizing our stay on Hokkaido, as well as to my travel companion, Jadwiga Rodowicz-Czechowska, Ph.D.

I hope to return to Japan. I believe there will be an occasion to do so – and that this is only the beginning of our cooperation.

Małgorzata Basaj

Head of the Exhibition and Public Engagement Department

Józef Piłsudski Museum in Sulejówek

It is my greatest pleasure to address the members and friends of the Hokkaido-Poland Culture Association on the pages of the POLE, after the fruitful and important stay in Japan in June 2025. Together with Małgorzata Basaj, the curator and head of the Exhibitions and Popularization Division of the Józef Piłsudski Museum in Sulejówek, we have had pleasure to undertake a major work for the future exhibitions. The exhibitions we are planning in our museum for Japan and Poland, are two: one in collaboration with Lithuania, UK and Japan, and another one in collaboration with cities of Tsuruga, Matsuyama and Shiraoi. My friend Małgorzata Basaj tells in her text about them, so I will not repeat it, but I will talk more about how it went.

Our study tour was conducted thanks to the grant from the Polish Ministry of Culture and National Heritage

in a program named Inspirational Culture, for the promotion of Polish themes abroad. We have been thinking for a while, how to talk about the major people from the Polish history to the Japanese audience and viewers. We noticed that the name Piłsudski is known in Japan mostly in relation to Bronisław Piłsudski (1866-1918), because of his contribution to the studies of the Ainu and Nivkh people in Sakhalin, and Hokkaido. The monument in Shiraoi, raised in 2013 to commemorate his stay there in 1903, reflects it perfectly. But very few people in Japan, apart from historians and specialists, know about Józef Piłsudski (1867-1935), Bronisław's younger brother, who is one of the founding fathers of the Polish independence in 1918. What is striking, though, is that the two realized in their lives the ideal of full activity and devotion to the social justice, with Józef being a gifted military commander, charismatic leader and strong politician. Bronisław was of milder mindset, and he abhorred violence, which he saw in extreme during his stay in Sakhalin on the penal colony, and in Vladivostok during the 1905 revolution. How they acted was very much the result of their home upbringing and early formation, so typical in the Lithuanian Poles. For example, we will talk about the role of their mother Maria, whose great character was exemplary. Another track is the Polish Romanticism and the ideals it set, of devotion to the Polish independence. We want to show this story in our future exhibition. This exhibition we want to present at places in Japan that have already strong links with the Polish history. Therefore, we want to present it in the Port of Humanity Tsuruga Muzeum, Sakanoue no Kumo Museum in Matsuyama (a city where the POW camp was set in 1904-1905 and where several dozen Poles stayed) and in Shiraoi. At present, we want to this exhibition between the Spring 2027 – Autumn 2028.

We were very happy to have been able to deliver two kinds of lectures during our stay in Japan. While Małgorzata Basaj lectured on the role of women in the Polish independence movement, I talked about the two Piłsudski brothers, and about Nitobe Inazō. Nitobe's story is not well known in Poland, but he met with several great Poles, politicians – Józef Piłsudski, Roman Dmowski, Ignacy Paderewski, and with Maria Skłodowska-Curie, and held them in high respect. I wrote a book about it, in Polish, which came out in July published by our museum.

On the other hand, on this stay we took opportunity to not only explain the future exhibition about the Piłsudski brothers, but to connect with another exhibition – on the Ainu Culture and Bronisław Piłsudski in 2026, in relation to the 160th Anniversary of his birth. In Małgorzata Basaj's text the Reader will find more about it. Thanks to prof. Ando Atsushi we went on a very well-prepared tour through Biratori and Shiraoi, together with Tahara Ryōko, with whom we already had a deep connection. As many members of the Hokkaido-Poland Cultural Association might remember, she led the Ainu women group Menoko Mosmos, in a project of Polish-Ainu Forefathers' Eve/Shinnurappa Kunnenisat in 2022.

But before the trip, we had pleasure to present our lectures to the Hokkaido-Poland Cultural Association at the L-Plaza, and a very fruitful and important talk with the audience afterwards. I personally was very happy to meet also with the former Ambassador of Lithuania in Japan, Algirdas Kudzys, Ph.D., who is helping now with the Polish-UK-Japanese exhibition on the Ainu and Bronisław Piłsudski. Another nice meeting was with Tsumura Reijirō Sensei of the Noh theater who is working on new Noh pieces in relation with Bronisław.

All in all, the trip in Japan was extremely demanding, as we traveled through Warsaw-Narita (airplane)-Tokyo-Tsuruga (Shinkansen)-Matsuyama (train through Kyoto and Okayama)-Narita-Sapporo (airplane)-Sapporo-Biratori-Shiraoi (car)-Chitose train)-Narita (airplane)-Warsaw. Wow. It was something. But we love our job and meeting with Japan and Japanese people is always so great and inspirational. We were also very grateful to our museum colleague Anna Wachowiak, the head of the Development Division and International Cooperation, who arranged all logistics for us, she did great work.

Thank you and see you again!

Jadwiga Rodowicz-Czechowska
Deputy Director for Development
Józef Piłsudski Museum in Sulejów

Our study visit to Japan was co-financed by the Ministry of Culture and National Heritage under the "*Inspiring Culture*" programme, 2025–2026.